

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

初のファンクラブ交流会が実現

仙台フィルハーモニークラブの皆さん来札

札幌くらぶの年間活動方針にもうたわれている、プロ・オーケストラのファンクラブ同士の交流が昨年12月に初めて実現しました。

スタッフ会議などで「他のオーケストラのファンクラブと直接交流し、情報交換などを通して、互いによりよい運営を求めていきたい」と話題になり、訪問団派遣を具体化しようと話し合っていたところ、昨年10月に、以前「札幌くらぶ」16号の「FAN CLUBの和」で紹介した仙台フィルハーモニー管弦楽団のファンクラブ、仙台フィルハーモニークラブ(S P C)の事務局長長島さんから「11月か12月に、キタラでの札幌のコンサートにツアーで聴きに行きたいので、札幌の演奏スケジュールを教えてほしい」との連絡が入りました。スタッフ一同、驚きと感激で、すぐに「熱烈歓迎」で意見一致、「心から歓迎します。チケットの手配も出来る限りのお手伝いをします」と返答しました。

その後、12月14日の定期演奏会にお出でいただけることになりました。札幌くらぶとしては、時間は遅くなるが、演奏会終了後歓迎交流会をぜひ実施したいと思い、ホテル・ルーシス札幌さんのご協力で、終演後午後11時までという異例の時間帯での交流会実施が実現することになりました。

S P Cからは、ツアー参加者は工藤会長はじめ10名、13日最終便で札幌入りし、15日に仙台に戻る、という連絡が来ました。

14日午前キタラを訪れたS P Cの皆さんは、仙台でもコンサートホールを、という動きがあるということで、約2時間、コンサートホール企画主幹の藤垣秀雄さんの案内で熱心にキタラの見学をしました。皆さん口々に感嘆の言葉を漏らされ、バックステージから男女のトイレに至るまで写真に収め、将来、仙台でコンサートホール建設が具体化した時の参考資料にしたいということでした。

一行は、夕刻再びキタラを訪れ、札幌定期を堪能され、その足で交流会の会場へと向かいました。

交流会には、S P Cの皆さんのほか、多数の札幌くらぶ会員や楽員の皆さん、そして尾高さんご夫妻も顔を出して下さいました。

(交流会の様子は4ページをご覧ください。)



歓迎の挨拶をする上田会長



挨拶を聞く出席者の皆さん

札幌くらぶは札幌を愛するファンの札幌応援団です

指揮者に聞く

昨年10月30日「札幌名曲コンサート フィンランド賛歌」公演のために札幌に来られた新田さんに、札幌のこと、フィンランドのこと、そして、音楽のことなどをお伺いしました。

札幌はシベリウスの音が
分かっていと思います
に
つ
た
新田 ユリさん
北欧の音楽を紹介する
注目の女性指揮者



新田ユリさんのプロフィール

国立音楽大学卒業。桐朋学園大学ディプロマコース指揮科入学。指揮を尾高忠明、小澤征爾、秋山和慶、小松一彦の各氏に、また、室内楽を三善晃氏に師事。1990年ブザンソン国際青年指揮者コンクールファイナリスト、91年東京国際音楽コンクール指揮部門第2位。同年に東響を指揮してデビュー。その後も、東京都響、新日フィル、東京シティフィル、仙台フィル、広島響、札幌、京都市響、神奈川フィル、大阪センチュリー響、名古屋フィルなどを指揮。また、吹奏楽団の指揮も手がけ、東京佼成ウインド・オーケストラとのCDもリリースしている。

2000年秋から1年間文化庁在外研修員としてフィンランドに派遣され、ラハティ響で研修。01年にはラハティ響メンバーを中心に「アンサンブル・イリス」を結成、フィンランドと日本の作品の演奏活動を開始し、注目されている。

新田ユリ公式ホームページ「森と湖の詩」
<http://www.yuri-muusikko.com/>

—— 最初に、札幌とのご縁についてお聞かせ下さい。

新田 私は東京生まれですが、父が札幌大学、北海道大学に5年間いて、私も小学校4年の終りまで札幌で育ちました。自分にとって大切な時間だと思っています。その後札幌には、大学卒業後と、10年ほど前に札幌さんとの「民音の第9」などに来ています。

—— 最初はピアノをやっておられたとか、指揮者を志したのは。

新田 都立高校在学中、オーケストラのサークルに所属してヴァイオリンを弾いていました。クラブ活動の中で指揮をすることもありました。国立音大時代に、指揮を勉強するサークルに入りましたが、その講師は小松一彦先生で、斎藤指揮法をみっちり4年間仕込まれました。卒業後も、2年間小松門下で学びました。

—— それからですか？尾高さんと出会うのは。

新田 市民オケで指揮者をしている時に客演で尾高先生が来られ、「いつも指揮している人やってみて」と言われたのが出会いです。オーケストラの公開レッスンで、曲はドヴォルザークの「新世界」でした。レッスンが終わってから尾高先生に「指揮棒を贈ります。頑張ってください」と言われたのが、本格的に指揮者を目指すきっかけになりました。そのすぐ後に桐朋学園大学ディプロマコース指揮科に合格し、尾高クラスで学びました。指揮者としては遅い出発でした。

—— フィンランドに行かれたのは？

新田 2000年10月から1年間、文化庁在外研修でフィンランドに行き、ラハティ交響楽団で学びました。このオーケストラは1999年にオスモ・ヴァンスカ氏のもと初来日を果たし、その折のシベリウス交響曲全曲演奏会は「衝撃的演奏」として知られています。現在も、引き続きヴァンスカ氏とシベリウス全曲録音を行なっています。私も研修中、コンサートとリハーサルで指揮しています。

—— フィンランドの風土と音楽はいかがでしょう。

新田 札幌にいたこともあって、もともと「北志向」でした。父がロシア語の先生でしたから初めはロシア音楽に親しんでいましたが、北欧の作品を通して、より透明感のある音、音そのものの魅力というものを感じるようにな

りました。

—— 音の透明感が、フィンランドのオーケストラの音の特色なのでしょう。

新田 フィンランドの音ということは意識していないと思いますが、確かにあると思います。それは、演奏家が日常どのような音を聞いているかとか、どのような空気に触れているかが、大きく関係していると思います。ラハティ市の音楽学校コンセルヴァトワールの学生オーケストラの授業の中での各楽器の先生方の話を聞いていると、技術的に、例えば金管であれば、アメリカサウンド的にきらびやかな、そして深い厚みのある音だと、下の倍音をしっかり含んだ音の出し方を勉強しますが、フィンランドではそれがなくて、上の方の倍音を重視しています。非常に透る音、そして澄んだ音、溶けやすい音、そういう音を作り出す方法をメソッドとして持っています。とにかくいい音を出せなくては、プロにはさせないという教育が行き届いています。

特に、フィンランドという国の文化として“静けさ”があり、ホームページにも書きましたが、お互いに静かな環境を守るということで、演奏家は非常に耳を大切にします。オーケストラの仕事は、打楽器の衝撃音など、大きな音が日常ですから、その中にいる人達にとっては音楽的な環境ではなくなります。音楽家として、耳を酷使している状況といえます。それから自分の耳を守るため、ほとんどの人が「耳栓」をして演奏している状況です。最近では欧米でもする人が増えているそうです。日本では、お互いに我慢する状況ですが、フィンランドのように、お互いケアし合って良い音を作るために自分のコンディションをキープすることは、すごく大事なことだと思います。フィンランドでは、それだけ音を出すこと、静かな音を追求することを大切にしています。

—— 音の透明感ということ、もう少し説明していただけますか。

新田 シベリウスの弦楽器によく使われるトレモ



ロを例にしますと、ドイツ系の音楽では、箱にいろいろな音がゴシャッと詰まっている感じですが、シベリウスの場合は、雪の結晶のように、はっきりとした形を持っていて、クリアな音が全体として集まった時に、非常に白い、何もない音になれ、そのクリアさが厚い壁を作らずにソロの音を突き抜けさせるというようなことになりましょうか。ラハティのシベリウス・ホールでは蛍光灯のノイズも気にして、録音の時など音のでない照明だけ使用するくらいで、またそれを売り物にし、そのようなスタイルを大切にしています。日本でも、各地でオーケストラの独自性は大切だと思います。

—— 札幌も独自のスタイルが必要だということですね。

新田 その通りだと思います。世界のオーケストラにも、それぞれ得意分野があります。



—— やはりシベリウスはフィンランドの人が演奏するのが上手ですね。札幌も得意ですが。

新田 シベリウスの音を分かっているというのでしょうか。札幌もそうですね。

—— 日本には女性の指揮者は何人くらいいるのでしょうか。

新田 日本では5人です。世界的には、米国では十数人、そして、音楽監督になっている方もいると聞いています。指揮者としては、女性だからといって困ったことはありません。根がのん気ですから、気になりません。(笑)

—— 新たな聴衆を獲得するには。

新田 学校の音楽教育でも、既成の価値観やスタイルを押しつけない、曲目の事前勉強はいらぬ、まず来て聴いて、自分なりに楽しむ経験が欲しいですね。

—— 今一番やりたいことは何ですか。

新田 北欧で仕入れた曲がたくさんあるので、どんどん日本で紹介したい、初演もたくさんあると思います。札幌が演奏してくれるといいですね。
(上田文雄・西川吉武)

SPC 歓迎交流会 から

ようこそ！ 仙台フィルハーモニークラブ 交流会
札幌くらぶ

後援 札幌交響楽団 ルーシス札幌

交流会は、上田文雄札幌くらぶ会長の歓迎の挨拶、工藤一郎SPC会長の答礼の挨拶、そして、尾高さんの挨拶と乾杯で宴が開始され、出席された楽員の皆さんの挨拶などをはさみ、和やかに進行し、今度は札幌くらぶが仙台に行かなければ、というような声があちこちで聞こえました。

ファンクラブ同士の交流会という画期的な企画は、両クラブの皆さんに多くの収穫と満足感を与え、鈴木美保札幌くらぶ副会長の締

めの乾杯で幕を閉じました。
当日の様子的一端を、写真でご紹介します。



SPC訪問ツアーの皆さん



和やかな語らい



楽員さんの自己紹介



SPCと楽員さんの語らい



楽員さんと札幌くらぶも仲良く

札幌物語 22

海外公演 ⑤

～こぼれ話 2～



出発1ヶ月前から札幌のわか添乗員になった私は、ポートランド・オレゴン空港とミュンヘン空港での入国手続きの際に必要な全員の横文字の名簿と、それぞれの国に持ち込む楽器の一覧表を作成することになりました。生まれて初めて英文タイプライターを使うことになりました。最新式の電動タイプライターを借りてきて、一本指打法で、同行するメンバーの姓名、生年月日、出生地、所属を、また、別紙には個人所有の楽器も含めて、持ち込む楽器すべての楽器名・メーカー・評価額の一覧表を打ち込んだのです。

名前はABC順で、楽器は弦楽器から順に直接用紙に打ち込むのです。最新式とは言え、パソコンと違って、一字間違えても最初から打ち直さなければならなかったのです。

やっと出来上がったと思ったら、参加予定のエキストラが病気のため行けなくなって変更になり、また最初からやり直しました。

また、当時はまだ複写文書が公式に認められないため、2組の名簿をそれぞれ作らねばならなかったのです。

新米添乗員は、馴れない英文タイプライターを相手に悪戦苦闘しながら、出発の前日にやっと名簿を完成しました。睡眠不足のため、快晴の空がまぶしい旅立ちでした。

千歳空港では、イエロー・カード（予防注射済み証明書）を持たないで来た人があり、騒ぎにはなったのですが、ともかく板垣市長以下30人の使節団と85人の札幌を乗せて、予定通りチャーター便はポートランド・オレゴン目指して飛び立ちました。

喫煙者だった私は飛び立ったとたんに気が緩み、禁煙サインが消えていないのに無意識にたばこをくわえ、火を付けようとしたのです。隣の席にいた西川修介氏（ヴィオラ首席奏者）に注意され、あわてて火も付けていないたばこを灰皿に押しつぶしたものでした。

千歳空港からポートランド空港、帰りのミュンヘン空港から千歳空港は、日本航空のボーイング727のチャーター機で、ポートランド空港からミュンヘン空港間は、パン・アメリカンの

B727でした。

旅行会社と打ち合わせの時までB727はすべて同じだと思い込んでいたのですが、客席数は基本的に130席前後なのに貨物室の構造は違って、ハードケースに入った大型楽器をスムーズに出し入れ出来る貨物室のB727はそんなに数が多くないことを知りました。各航空会社は、世界的な規模で機材のやりくりをして楽器の出し入れが出来る機材を廻してくれたのでした。

札幌の大型楽器を収納するハードケースは、このツアーのために初めて東京の石川トランクに発注して作りました。

積荷としては軽いもので、約3トン程でしたが、楽器は嵩張るので、積荷としては重量ではなく容積で測られることになりました。

札幌ではその後楽器の数も増えて、現在は11トンロング・ボディーのトラックにも入り切らないほどあります。

バイオリンその他の手持ち楽器は、客室の最後尾の客席12席を取り払って収納し、ネットでしっかり床に固定しました。

札幌には添乗員がつかなかったのですが、同行する使節団の世話と現地移動用バスや航空会社との連絡、ホテルの手配をしてくれた日本交通公社は、貨物（大型楽器、手荷物その他）を担当する専門家を1人付けていました。離陸したら一眠りするつもりだったのに、シートベルト着用のサインが消えたときたんに彼は「仕事が残っていますよ」とにこにこしながら寄ってきました。

アメリカへの第一歩はアラスカのアンカレッジ空港でしたが、そこで検疫と入国手続きがあり、出発前に寝ないで用意した一覧表とは別に個人票を用意しなければならず、用意してくれた85人分の用紙に記入するのが仕事でした。

にわか添乗員が夢中になって仕事をしているのをよそ目に、乗客は修学旅行気分ですらリラックスしていました。国際線なので、乗客用のアルコール飲料がかなり大量に積み込んであったのですが、短時間で飲み干してしまいました。

つづく（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 バストロンボーン奏者

のぐち たかのぶ
野口 隆信 さん



音楽との出会いは

小学3年の頃、鼓笛隊の活動に熱心な音楽の先生がいて、そこで小太鼓を担当したことが音楽に関わるきっかけとなりました。

トロンボーンを始められたきっかけは

中学校に入ると、上級生がいろいろなクラブへの勧誘にきますよね。私は中学生の頃から割と体が大きかったので、きっと手も長いだろう、ということでブラスバンドの先輩からトロンボーンをやれと言われ、いきなりトロンボーンを持たされてやってみるのが始まりです。あまりまじめな部員ではなく、2年生くらいまではサボってばかりいて、よく先輩に追っかけられていました。3年生になってから、最上級生なのでちゃんとやらなきゃいかんかな、と思って真面目にやり出しました。

その後は、高校時代も続け、東京音楽大学在学中には、桐朋学園のオーケストラの研究生として2年ほど通っていました。

札幌入団の経緯は

大学を卒業する頃に、北海道出身の友人の紹介でエキストラとして札幌に呼んでいただきました。1年半ほど、東京・札幌間を行ったり来たりで客員団員をやっていて、その後オーディションを受けて入団することになりました。

北海道はその時が初めて

大学4年の終りのその時が初めてです。

その時の印象は

初めて来たのが、本当に冬の真っ最中で、僕は生まれが九州なものですから、九州でも雪は降ることは降るんですが、本当にほうきでさっと掃く程度です。すから、「ああ〜っ、これが雪だ!」とすごく感激しました。

今までの演奏活動の中で思い出に残っていることは

一番近いところでは、やはり昨年の英国公演ですね。ちょうど時期的に米国での同時多発テロと重なるなど、いろいろなことがありましたが、英国の方々と触れ合いができ、演奏会はこの会場もすごくよかった。4~5年に一度くらいそういう経験ができれば、オーケストラとしてもすごく成長できるのではないかな、と思いました。

また、奥尻沖地震や、有珠山噴火の後に、現地へ行って公演した時のことも印象に残っています。

趣味は何でしょうか

北海道へ来てから始めた釣りです。年数は結構やっているのですが、なかなか釣れませんねえ。しかし、釣れなくても、例えば防波堤とかに、4~5時間ボーッと寝転んでいるだけでも結構楽しいです。札幌メンバーにも釣り好きな人が結構多くて、海辺近辺の地方公演会などでは、時間のあいている時にはよく釣りをやったりしていますよ。

それと、今年からゴルフを始めました。今までは天気がいいと海の方にしか向いていなかったのですが、最近は緑の方もいいかな、と思って、……。実は、クラブは以前から持っていたのですが、20年くらいずっとビニールがかかったままの状態、今年やっと使うことになりました。

札幌くらぶについて何か一言

実は、札幌くらぶができる頃、僕は打楽器の大垣内さんと一緒に、山科俊郎前会長・上田文雄現会長の4人でよくお会いするなどして、札幌くらぶの設立に関わってきました。ですから「札幌くらぶ」というファンクラブができたときは、すごく嬉しかったです。これからは、札幌だけではなく、全道にも

そういう輪が広がっていったらいいな、と思っています。

最後に今後の抱負を一言

札幌ができて40年が過ぎましたが、オーケストラとしてはまだ若い方で、最近やっと音ができてきた、という感じなので、更に磨きをかけていいオーケストラになっていきたいと思っています。そし

て、それを支えてくださるのがやはりお客様、そして札幌くらぶの皆さんですので、そういうお客様との交流がとても大切だと思います。演奏会にはもちろん来ていただきたいですが、その他にいろいろな交流を通じて、お互いを身近なものに感じられるように、距離感がどんどん近くなってくればいいな、と思っています。

(佐藤慶一)

札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

ど い かなで
土井 奏 さん

奏さんというお名前……ご両親は音楽関係のお仕事を

両親が音大出身ですので、子供に期待をかけた表れでしょうか。ちなみに、私の弟の名前は「響（ひびき）」といいます。

ヴァイオリンを専門にしたいきさつは

ヴァイオリン自体は3歳の頃から始めていたと思います。しかし、それで生活しようとずっと考えていた訳ではありません。

私は富山出身ですので、地元の富山大学の哲学科に入学し、卒業後は高校の先生にでもなろうかと思っていました。その傍ら、サークル活動で大学のオーケストラに入り、大学生活をエンジョイしていました。

そのうちに、サークル活動も含め、元々、いろいろと音楽を身近に感じる環境の中で、「自分も音楽の仕事がしたい」と考えるようになりました。そのためには音大にと思う気持ちが徐々に強くなり、それを実現する機会は今しかないと思い、愛知県立芸術大学を受験する決断をし、入学しました。

札幌入団のいきさつは

愛知県立芸大を卒業後、セントラル愛知交響楽団に入団し演奏活動を始めましたが、ある時に、同僚の楽員から、札幌でヴァイオリンのオーディションがあると聞きました。

実は、小学校3年生のときに、富山で札幌のコンサートを聴いているんです。そのとき大変感動したことが思い出され、すぐにオーディションを受ける決意をしました。札幌にはその時始めて来ました。私としては「北の大地へ」というような思いでした。



札幌に入団していかがですか

芸術の森のアートホールの練習場、コンサートホール“キタラ”、私にとってはこれからの演奏活動にこれ以上の環境はないと思っています。

今は、本当に充実した毎日を送っています。

そのキタラについてどんな印象ですか

今、冬を目の前にして、落ち葉を踏んで歩く中島公園。そのたたずまいの素晴らしさは何とも言えません。キタラに行くまでの間に、今日の公演の心構えが出来上がるという感じで、こんな素晴らしい環境のホールで演奏できるのは本当に幸せです。

札幌の印象についてお聞かせ下さい

確かに寒いですね。でも「シバレ」もいいものだと思います。私も雪国出身ですが、雪がサラサラしていて、雪玉が作れないのにはびっくりしました。

最後に札幌くらぶについて一言お聞かせ下さい

これからも札幌をよろしく願います、という言葉に尽きると思います。よろしく願います。

(細川馨)

from 「札幌くらぶ」

第5回札幌くらぶコンサートのご案内

～今年には西本智実のシェエラザード～

毎回ご好評いただいております「札幌くらぶコンサート」も、今年で5回目を迎えます。これまで、渡辺一正、尾高忠明、青島広志、飯森範親の各氏を指揮者としてお迎えしましたが、今回は昨年の滝川公演、キタラのクリスマスコンサートでも抜群の人気ぶりを発揮された、人気女性指揮者西本智実さんをお迎えすることになりました。

プログラムの細部など、まだ未定の部分もありますが、現在までに決定している点を以下にお知らせいたします。

プログラム

グリムカノ歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲
チャイコフスキー／ピアノ協奏曲第1番冒頭部（指揮者コーナー）
リムスキー・コルサホフ／交響組曲「シェエラザード」

他

指揮とお話 西本 智実
管 弦 楽 札幌交響楽団

日 時 平成15年4月26日（土）午後5時開演（開場は午後4時30分）
会 場 札幌コンサートホール・Kitara 大ホール
入場料 一般 2500円 学生（高校生以下）500円（全席指定）
取扱所 大丸プレイガイド、キタラチケットセンター、札幌チケットサービス
お問い合わせは 札幌チケットサービス（Tel 011-520-1780）
発売日 未定ですが、一般販売は3月1日頃を予定しています。
会員への先行販売は、2月上旬を予定しています。後日郵送でご案内します。

※今回はチケットの入手困難が予想されます。会員の皆様には、ご家族、ご友人の分も含め、会員先行販売のご利用をお勧めいたします。

編集後記

念願のファンクラブ同士の交流会が実現し、遅い時間にもかかわらず、一般会員の方々から20名を越えるご出席の申し込みがあり、スタッフ一同感激いたしました。また、大曲2曲を演奏した後のお疲れのところをご出席下さった、尾高さんご夫妻と楽員の皆さん、そして札幌事務局の皆さんには感謝申し上げる次第です。

懇談の中で、SPCの工藤会長に「今度は仙台で、SPC、山響ファンクラブ、札幌くらぶの三者合同の交流会ができればいいですね」と申し上げたところ、工藤会長も「是非実現した

いですね」とおっしゃっていました。いつの日か、本当に実現するかもしれません。その時には、札幌くらぶもSPCに負けないくらいの人数で行きたいものだと思います。今後とも、各ファンクラブと連絡を取り合っていきたいと思っています。

前号でお知らせした札幌の新たなCDの販売が開始されました。さっそく買い求めて聴いてみましたが、おなじみの曲をオーケストラの荘重な響きで楽しめます。札幌事務局でお買い求め下さい。（佐藤良次）